

## はじめに

第6回公開シンポジウム「古典における新しい価値の発見」は、平成13年9月6日(木)から8日(土)の3日間にわたって、学術総合センター内の一ツ橋記念講堂において開催された。

開会の辞において藤沢令夫先生(本特定領域研究評価委員・京都大学名誉教授)は、今日の科学技術文明のあり方に反省を促すものとしての古典の役割が緊要であることを強調された。次いで7氏の基調講演があった。(1)西洋古典学:Oswyn Murray教授(Oxford大学)「英国とヨーロッパの伝統における古典学研究 過去と未来」,(2)インド学:Michael Witzel教授(Harvard大学)「今日と明日のための古典の価値 インド古典から」,(3)トルコ学:Robert Dankoff教授(Chicago大学)「トルコ文献学とエウリア・チェレピの旅行記」,(4)中国学:葛兆光教授(北京・清華大学)「中国古典図像の思想史研究」,(5)中国学:張隆溪教授(香港城市大学)「解釈学的方法と古典学の復興」,(6)イスラエル学:Joerg Jeremias教授(Marburg大学)「旧約聖書の神の像」,(7)動物行動学:日高敏隆教授(総合地球環境学研究所)「動物行動学から見た古典」。日高先生は動物世界という異世界から、人間の認識に関する根本的な視点(「幻想」)を喚起された。

また全体討論「古典学の再構築・目標と方法」、パネルディスカッション「古典学の現状と未来」、総括討論「古典における新しい価値の発見」という三種の討論会を通じて、文明の形成と発展の上で古典が果たした重要な役割と、今後古典学が担うべき社会的責務について明確な共通理解が獲得されたと思われる。

このほか文部科学省の宮嶋和男研究振興局主任学術調査官(当時)が「科研費をより効果的に使うために」と題して講演され、人件費支出の新方法など新設の諸規定を紹介しつつ数々の疑問にもお答え下さり、まことに有益であった。

閉会の辞は高崎直道先生(本特定領域研究評価委員)のご都合がつかず、久保正彰先生(学士院会員)に急遽お代わりいただいた。先生は古典学の来し方と将来像を精緻な英語で総括下さった。

今回のシンポジウムでは諸外国の研究者を交えた講演、討論によって、「価値の創造者としての古典」、「時流に馴致されず時代を照射する古典」など、各文明の古典の個性が鮮明に印象付けられたことが大きな成果であったのではなからうか。

講演者の招聘に尽力を惜しまれなかった間野英二(京都大学)、関根清三(東京大学)、平田昌司(京都大学)、杉山正明(京都大学)、葛西康德(新潟大学)の諸氏に厚くお礼申し上げます。これらの方々のほか Michael Witzel(Harvard大学)、桂紹隆(広島大学)、川原秀城(東京大学)、高島淳(東京外国語大学)の各氏も司会を担当された。外にも協力を惜しまれなかった多くの人々にお礼申し上げます。

いつも対話が心地よく響き合う上山春平先生の対談シリーズは、今号は「イスラエル学」の市川裕氏(B04班・東京大学)が相手である。

5年にわたる本特定領域を締めくくる次回の公開シンポジウムは、「創造の源泉としての古典」をテーマとして、本年9月22日・23日に京都で開催する予定である。古典は新しい価値を創造し、よりよい未来を創出する源泉であると考えられるが、大きな成果を挙げるために皆さんのお考えをお聞かせ願いたい。貴重なご意見を賜ってよりよいものとしたいと希っている。

平成14年3月

領域代表 中谷 英明